第68回（2024年度）　北海道開発技術研究発表会論文

# アイアンマンジャパンみなみ北海道大会2024と函館開発建設部の関わり
## ―高規格道路のイベント活用事例―

函館開発建設部　道路計画課[1]　○石垣　春季[1]
道路計画課[2]　藤井　大道[2]
地域連携課[3]　山田　研太[3]

令和6年9月、北斗市及び木古内町を舞台としてトライアスロンの国際大会「アイアンマンジャパンみなみ北海道大会2024」が開催された。本稿では前述のトライアスロン大会において、高規格道路及び国道の一部をフィールドとして提供した事例を紹介するほか、大会の開催にあたり実施した情報発信及び地域協働の取り組みについて報告する。

キーワード：高規格道路、イベント、共創、地域協働

## １．はじめに

本論文では、函館開発建設部（以下「当部」という。）が高規格道路及び国道の一部をトライアスロン国際大会「アイアンマンレース」のフィールドとして提供した事例を紹介するほか、大会の開催にあたり実施した情報発信及び地域協働の取り組みについて報告するとともに、今後の可能性、取り組みの課題を踏まえた今後の展望について考察する。

### (1) アイアンマンレースとは

アイアンマンレースは、ワールド・トライアスロン・コーポレーション（WTC）が公認するトライアスロン大会であり、「世界で最も過酷なトライアスロン」として知られている。競技は、スイム3.8km、バイク180km、ラン42km、総距離226kmで行われ、トライアスロン競技の中では最も長いレース規格であるロングディスタンスに分類され、完走者には「アイアンマン（鉄人）」の称号が与えられる。なお、オリンピックのトライアスロン競技の規格はオリンピックディスタンスと呼ばれ、スイム1.5km、バイク40km、ラン10kmであることから、アイアンマンレースがいかに過酷なレースであるかが分かる。

### (2) アイアンマンジャパンみなみ北海道大会2024の概要

#### a) 大会の概要

本大会は、2024年9月15日（日）、日本国内において2015年以来9年ぶりに開催されたフルディスタンスのアイアンマンレースである。レースの舞台は道南に位置する北斗市と木古内町で、大会エントリー開始からわずか2週間で定員の1,500人に達し、出場選手の約13%が海外から参加する等、世界的にも注目を集めた大会となった。

レースは早朝6時30分に北斗市の上磯漁港をスタート。最初のスイムでは、漁港周辺の函館湾を泳ぐ1周1.9kmのコースを2周する。続いてのバイクでは、スイム会場の上磯漁港から国道228号を木古内方面に進み、北斗富川ICから函館・江差自動車道に入り、北斗中央IC～木古内ICの区間を周回する。最後のランでは、木古内町内の14kmのコースを3周し、ゴールの木古内町役場に制限時間の深夜0時までにゴールするという内容である。（図-1）

図-1　アイアンマンジャパンみなみ北海道大会2024のコース

#### b) レースの舞台の特徴

レースの舞台となる道南の特徴として、陸・海・空の3つの移動手段が揃うアクセスの良さが挙げられる。函館空港へは東京・羽田空港から約80分で到着し、ほかの主要都市からのフライトも数多く就航している。また、北海道新幹線を利用すると東京駅から新函館北斗駅まで約4時間で到着することができる。さらに、本州から車

で移動する場合は、青森や大間と函館を結ぶフェリーでのアクセスも可能となっている。（図-2）

図-2　レース会場へのアクセス

また、北斗市、木古内町に広がる大自然、道南ならではのロケーションもコースの特徴として挙げられる。スイムは遠浅の内海から函館山を望む絶景ルート。バイクは函館・江差自動車道を占用したルートとなっており、道南のランドマークである駒ヶ岳も望むことができる。ランは木古内の風光明媚な自然を感じられるルートとなっており、道南の魅力が詰まったルートとなっている。（写真-1,2,3）

写真-1　スイムコースを泳ぐ選手と函館山

写真-2　駒ヶ岳とバイクコース

写真-3　木古内町内のランコース

### (3) アイアンマンジャパンみなみ北海道大会2024と函館開発建設部の関わり

**a) 本大会との関わりの経緯**

本大会の開催に向けては、2023年5月頃、大会実行委員会より当部に対して、函館・江差自動車道をバイクコースとして使用できないかと相談を受けたことを契機に、関わりを持っていくこととなった。

トライアスロンに限らず、国内において公道を使用するスポーツイベントは、許認可関係など実施に向けて関係者との調整に時間を要するのが実情といえる。そんな中、「国が管理する高規格道路をコースに利用する」アイアンマンレースは日本で初めての試みであった。

**b) 「北海道総合開発計画」との関わり**

北海道開発局は、「北海道総合開発計画」の推進を担っている。北海道総合開発計画は、北海道の価値・ポテンシャルを最大限に活かし、我が国の課題解決に貢献するとともに、地域の活力ある発展を図るために策定されており、第9期目となる本計画（以下「9期計画」という。）の推進にあたっては、多様な関係者と共に未来を創る「共創」という理念が掲げられている。

今回の大会は、地域住民や周辺自治体、企業など多様な関係者と共に創りあげる、共創という点で、9期計画の理念と合致していることから、当部においても大会の成功に向けて、協力していく運びとなった。

## ２．函館開発建設部の取り組み

当部は、本大会を後援し、さらに、大会役員に部長、大会実行委員会委員に地域連携課長（2023年度にあっては地域振興対策室長）が参画した。また、道路部門ではバイクコースを提供するにあたり、道路の通行規制に関する協力を行った。以下に、当部の具体的な取り組みについて紹介する。

### (1) バイクコースの提供

当部が管理している高規格道路「函館・江差自動車道」のうち、北斗中央IC～木古内IC区間（延長約26.0km）及び国道228号の一部（延長約3.5km）をバイクコースのフィールドとして提供した。

これまで北海道開発局が管理する高規格道路をアイアンマンレースのフィールドとして使用したことはなく、今回が初の試みであり、開通後の高規格道路を利用したスポーツ大会の開催は全国でも例が少ない中での開催となった。

フィールドを提供するにあたり、大会実行委員会と幾度となく打合せを行い、選手と観客の安全性の確認や通行規制方法に関する協力・提案を行った。具体的な取り組みとして、国道228号の区間について、当初は片側を車線規制しながらバイクを走行させる方法を検討していたが、函館・江差自動車道の通行止めや長距離・長時間の規制となることから、渋滞等の社会的影響が懸念された。そこで、大会実行委員会に対して、車両の走行に必要な車線幅員等を説明し、路肩側にバイクを走行させ、中央線をバイクが走行しない側に僅かにずらすことで車線規制を行わない方法を提案し、それを実現した。また、函館・江差自動車道の通行止めについては、大会のスケジュールに合わせて規制時間を調整し、高規格道路の通行止めの開始及び解除に関わる作業を支援した。さらに、大会実行委員会と当日の連絡体制を構築し、レースが円滑に行われるように協力した。（写真-4,5）

写真-4　当部が通行止めの支援をする様子

写真-5　国道228号を走る選手

バイクコースは、全面規制された高規格道路による安全な走行と、走行中に楽しめる道南の美しい景色が好評であった。（写真-6）

また、大会当日は高規格道路を通行止めする為の一般車両の追い出し作業やパトロール作業を行ったほか、高規格道路内のバイクコースには一般の観客が立ち入ることができないため、当部の提案で高規格道路の道路情報板に「IRONMAN　信じて進め！」「めざせ！アイアンマン　GO IRONMAN」などのメッセージを表示し、選手を応援した。（３．(2)参照、写真-7）

写真-6　高規格道路を走る選手

写真-7　道路情報板の応援メッセージ

### (2) 情報発信

レースを安全に開催するためには、通行規制情報の周知が重要となった。そこで当部では、渡島・檜山管内の国道の道路情報板、道の駅「おしらせ道ねっと」（メッセージボード付き自動販売機）で通行規制情報を表示し、周知を図った。

また、大会実行委員会と合同で函館のコミュニティラジオ「FMいるか」に出演し、大会のPRを行った。大会実行委員会からは、アイアンマンレースの歴史や魅力を紹介し、大会ボランティアへの協力を呼び掛けた。当部からは、当日の通行規制情報の周知を図ったほか、大会と連携したシーニックバイウェイ北海道、道南サイクルツーリズム推進協議会の取り組みや、大会に合わせて出展した道南の美しい景観等を紹介するフォトパネル展のPRを行った。さらに、9期計画の理念に掲げる「共創」と、地域と多様な関係者と共に創りあげる本大会との関連性を紹介し、9期計画のPRも行った。（写真-8,9,10）

その他、記者発表や当部の公式Xで詳細の通行規制情報や当部の取り組みについて情報発信を行った。

写真-8　国道の道路情報板で情報提供

写真-9　道の駅「おしらせ道ねっと」で情報提供

写真-10　「FMいるか」出演の様子

### (3) その他、大会と連携した取り組み

**a)スイム会場清掃活動への参加**

大会前日、大会実行委員会とシーニックバイウェイ北海道　函館・大沼・噴火湾ルートが連携し、スイム会場（上磯漁港）の清掃活動を行った。レースでは選手が素足で海へ入水するため、怪我をしないよう、砂浜に散乱するゴミ、貝殻、海藻、流木等を丁寧に拾い、レースのスタート地点として相応しい場所になるよう、活動に取り組んだ。（写真-11）

**b)大会ボランティアへの参加**

大会のボランティアとして、当部の職員も参加した。レース前日には、約1,400本のドリンクをボトルにつめる給水準備を行い、レース当日は、バイクコースの木古内エイドで給水ボランティアを行い、バイクに乗ったまま給水を求める選手にボトルを手渡し、声援を送った。

一般の観客が立ち入ることができない高規格道路内のバイクコースにおいては、道路情報板の取り組みとともに、エイドの給水ボランティアによる声援は選手にとって大きな励みとなった。また、レース翌日には、約1,400台のバイクを選手に返却するボランティアなども行った。（写真-12）

**c)イベントブースの出展**

大会とのコラボ企画として、大会当日及び翌日に、シーニックバイウェイ北海道　どうなん・追分シーニックバイウェイルート、道南サイクルツーリズム推進協議会と連携したイベントブースの出展を行った。イベントブースでは、「どうなん海道サイクルルート」の紹介や道南の美しい景観のフォトパネル、シーニックバイウェイ北海道の活動のPRに合わせ、9期計画のPRも行った。（写真-13）

写真-11　清掃活動の様子

写真-12　給水ボランティアの様子

写真-13　イベントブースの様子

## ３．大会の開催結果

### ⑴ 結果の概要

選手約1,400人（国内から約1,200人、海外から約200人が参加）、運営スタッフ約1,500人が参加した大規模な大会が実現した。安定した気象条件や選手を鼓舞する観客の応援もあってか、93.4%の出場者が完走し、大きな事故も無く大成功を収めた。当部で協力した通行規制においても、予定時刻どおり開始・解除が行われ、大きな混乱や事故もないレースとなった。

また、本大会は、レース後の出場者アンケートの「総合満足度」で、87%の支持を得ることができた。これは、世界のアイアンマン大会の平均値を上回る高評価で、本大会は、開催1年目にして世界のスタンダードとして認められた。高い評価を得られた背景として、道南を満喫できる唯一無二のコースであること、初心者に優しいレースコンディションであることが挙げられる。9月中旬の北海道の穏やかな気候や17時間という余裕のある制限時間、全面規制された高規格道路の安全なバイクコース、フラット基調となるランコースなど、選手にとっても走りやすい環境であったといえる。（写真-14）

写真-14　選手がゴールする様子

### ⑵ 大会後の選手の反応

大会実行委員会が実施した選手アンケートにおいて、出場選手から寄せられた感想や意見等を紹介する（原文ママ）。

・バイクコースの景色がキレイでよかった。
・バイクコースの応援（橋や畑の中）が嬉しかった。
・北海道の美しい自然を楽しめるのが特徴で、特にバイクパートでは普段自転車では走れない高規格道路を使用するため、他では味わえない体験ができる。
・高規格道路のため、基本的に応援の方達は沿道に入れないが、側道で応援してくれる方がいてとても嬉しかった。
・前日の浜辺の清掃をしていただいているのを見て、ホンマ泣きそうになった。ボランティアの皆様のおかげで最高のレースにしていただいた。
・皆様のサポートのおかげで宝石のように輝く一生忘れられない体験が出来た。
・高規格道路の電光掲示板にも「Anything is Possible」と表示されていて、この表示にも励まされた。

### ⑶ 経済効果等

招致段階に大会実行委員会が推計した函館市の観光経済への波及効果によれば、選手の平均滞在日数は約4泊5日であり、宿泊費、飲食費、土産購入費などの生産波及効果は約2億5千万円にのぼる。さらに、会場利用費や設備工事費、警備費等の地元業者への業務委託費が約9千万円見込まれ、かつ航空や鉄道、バス、フェリー等の交通各社に対する経済効果も約1億2千万円見込まれている。大会後の選手アンケートにおいても選手の平均滞在日数は約4泊5日という結果であったことから、函館市及び周辺地域の観光経済に大きく寄与したものと考えられる。
※経済波及効果については、函館市観光基本計画（2014-2023）の函館市産業連関表を用いて大会実行委員会が推計。

次回大会が、2025年9月14日（日）に開催されることが決定しており、今後の道南の経済効果・PR効果への期待が高まる。

## ４．今後の課題と展望

高規格道路及び国道の一部をバイクコースとして提供するにあたり、初めての試みが多く、大会実行委員会との調整や手続き等に時間を要することとなった。また、高規格道路の規制解除について、大会実行委員会の担当スタッフの業務が輻輳したことにより、規制解除予定時刻ぎりぎりとなってしまった。次回に向けては、大会実行委員会と調整のもと、スタッフの業務分担を再整理し、例え不測の業務が発生したとしても規制解除作業には影響しない体制づくりが必要となる。

今年度の経験を引継ぎ、次年度以降の速やかな調整につなげていきたい。

## ５．おわりに

アイアンマンジャパンみなみ北海道大会 2024 は、多くの地域関係者と協働することで、まさに「共創」による大会であったといえるだろう。結果として、出場選手から好評をいただき、次年度の継続開催が決定した事は、今後の道南地域の活性化に大きな期待を抱かせる。当部としても、引き続き協力を続けていきたい。